いまはむしろ背後の馬を撃て

吉本隆明

ルビコン書房

いまはむしろ背後の鳥を撃て

――連合赤軍事件をめぐって――

吉本隆明

ルビコン書房設立一周年記念　吉本隆明講演会　一九七二年七月六日　於横浜勤労会館

連合赤軍事件の反応に見られる知識人階層の今日的情況

連合赤軍事件に対する戦中派知識人の反応

ただいまご紹介にあずかりました吉本です。たいへんいかめしいことをしゃべらねばならんようなのですけれどもあまりいかめしくならないと思います。まあ連合赤軍事件についての感想程度のものだというふうに聞いていただければいちばんよろしいと思います。

私が立っています場所というものとみなさんが立っておられる場所と、主催者の方が立っておられる場所とはそれぞれ違うので、違うということで、何といいますか、ちょっと眺めればみんな見通しなんだという具合には存在していないということが非常に大きな問題だと思います。つまりその共通基盤が、存在しているかのように考えると自分の守備範囲と場所というものを逸脱して床屋政談みたいになっていくので、それはあんまりしたくないという原則がありますから、そういうところでお話ししてみたいと思います。

僕の立っている現在の場所からいちばん気にかかったところから申し上げます。それは具体的に申し上げてかまわないわけですけれども、連合赤軍事件なるものが一連の事件ニュースとして報道されていくと、それはまあ浅間山荘事件というものがあって、その後からリンチ殺人事件というものがもちあがってくるという形で、我々の目には触れてきたわけです。その場合に僕なんかが一番ひっかかったということは何かと言いますと、まず第一に浅間山荘事件の割合に直前ぐらいだと思いますけれど、一つは小山弘健さんていう人が軍事問題についての研究というのが非常に重要な問題なんだっていうことをある新聞で書いていたということを記憶しています。それで僕はそれを読んだ時ものすごく不愉快だったわけです。なぜ不愉快かって言いますと小山さんていう人は少なくとも大人っていいますか、お年寄りなんで、つまりお年寄りだっていうことは戦争を体験しているわけです。

小山さんの戦時中における軍事問題、軍事産業問題についての研究あるいは著書っていうものはどういう役割を果たしたかっていいますと、それはいわば一定の生産力、あるいは生産技術至上主義みたいなそういうところから、つまり生産力理論みたいなところから、知らず知

らずに戦争の方に滑っていったということがあるわけです。皆さんの方は御存知ないかもしれませんが、そういう研究自体を通じてそれは一定の生産力増強理論みたいなものを合理化するという形で、しかもそれは軍事生産自体を合理化するという形で戦争謳歌というようなところに繋がっていったという過去の大きな問題があるわけです。

僕の考えではそういう体験を経てきた人間というものが、例えばマルクス主義というものが軍事問題についての研究が必須なものであるというようなことを現在言う場合には、ひねりと言いましょうか、屈折というものがきいていなければいけないはずなんです。これは皆さんの方では想像を絶するかもしれないけれど、僕らは良く知っているわけで、だからそういうことを考えますとそれは決して今例えば様々な学生運動のセクトとかこの他軍事問題を提起しているということとみだりに迎合すべきことでなくて、それはやはりひねりが働いた形でその問題は出されてこなければいけないということがあるわけなんです。

そういうことは、皆さんの方では重要には考えないかもしれないけれども、戦争を経ている者、つまり、人を殺したりあるいは少なくとも自分の肉親を見渡せば必ず一人や二人殺されてきた人間にとっては、ただ今現在皆さんが軍事問題について提起されているということがあったら、それに対して迎合するという形ではなくて、言わばひねりを働かせた形でつまりひねりが効いた形でそういう問題が提起されていかなければならないというふうに僕には考えられるわけです。しかし小山さんの発言の中には少しもひねりが効いていない、それは僕にいわせれば、イデオローグとしては全く失格なんだとしか考えられないのです。

これと同じなんですけれど浅田光輝さんが例えば浅間山荘事件が起こった時に連合赤軍の竜城組に対する「赤十字」の気持ちで現地へ駆けつけた、なんていう発言があったわけですけれども、僕はそれを全く不愉快な発言であるというふうに聞きました。何故ならば浅田さんという人はかつて中央労働学院の学生さんが、日本共産党の内ゲバの過程で自殺したということを契機にして百万言を費して日本共産党の非人間性というものを鳴らした、つまり批判した、そういう人なんです。そういう人が例えば、僕はどういう契機でそうなったのか知りませんけれど「赤十字」のような気持ちで浅間山荘のそばへ駆けつけて行ったというのは、全く聞いちゃいられないという感じで、大変不愉快な思い、つまり悲しいというのか不愉快というのか問題外だというふうに僕はその時考えたんです。それでつまりこの種のイデオローグにはなりたくねえもんだというのが僕の自戒でして、大変不愉快でした。

構革派イデオローグに於ける「軍事論」の誤り

ところでやはり、前後して僕が目に触れた限りでは山崎カヲルという、若い構革派のイデオローグだと思いますけれど、よくは知りませんけど僕の見当ではそうなんですけれど、そういう構革派のイデオローグがやっぱり革命の問題は軍事の問題、軍事の問題の80%から90%というものが軍事技術の問題であり、それからまた、戦略というものと戦術というものを分離して考えようという考え方の問題だと、それにはマルクスの才能なんてのはいらなくて、技術だけいるんだ、つまり軍事技術だけがいるんだというような発言をしているわけです。これもまた、全く不愉快なもんであると僕は聞きました。つまりなぜ不愉快かと言いますと、理論的にはナンセンスだということは、言うまでもないことなんですけれど、そんなことは言ったってしょうがないから、それは別にしましてもですね、大体構革派っていうのは何だって言うと、あれは、道路がぬれていると坐り込みも嫌だっていうような、これはかつて谷川雁さんが「あいつらは三流のスマートボーイだ」というふうに言ったことはあるんですけれど、そういう人がどうして突然、突然変異で軍事の問題だというふうにして、軍事の問題の90%は軍事技術の問題だ、つまり鉄砲をどう撃ったら、どう狙ったらどうあたるかという問題だ、その問題こそが革命の問題だということを、突然として言い出すというのは僕には納得がいかないわけです。しかしもちろん御当人に言わせれば突然じゃないんだって言うかも知れないけれど、しかし、少なくともわれわれ目に触れている限りでは、ソ連共産党二十回大会を契機として、フルシチョフ主義というものを至上として自分らの運動を進めてきた人が、突然、革命の問題は軍事の問題で、軍事の問題の90%は軍事技術の問題だという、そういうアホらしいことを、アホらしい革命論を突然いってもらっては困るんだ。つまりこれはとんでもねえ奴だっていうのが僕なんかの印象です。

こういうことはたくさんあるわけです。いいだ・ももなら、いいだ・ももをとってもいいわけです。それでやっぱり彼もフルシチョフ主義というものを、至上の綱領として組織をくんできた、そういう人間から、どうしていつ「第三世界論」というものが始まったのか、僕には見当がつかないわけです。つまり、「第三世界論」を言い出す、「第三世界論」から、今度は「植民地闘争論」、それで結局もう皆トンネルで繋がっちゃうわけですよ、そういうふうにやっていきますとね。後進地帯、植民地帯における民族主義的闘争から何から何まで全部トンネルで繋げるわけです。それでどうしてそういう考え方に移行したかっていうことで、全く不愉快であると思っていた。そうしたら、全く偶然か、大変興味深いことにその種の発言の直後に、浅間山荘事件があり、その直後にリンチ殺人事件があった。それで、これは週刊誌の記事だからあてにならないですけれど、リンチ殺人事件に関して、見解を聞かれたら逃げちゃった。そういうふうに書いてありましたけれど、そういう場合だろうと、一週間もしたら、逃げなくちゃならないような、そういうことはやっぱりイデオローグとしては言うべきでない。

つまり、イデオロギーというものは、そんなちゃちなものではないんだと僕は考えておりますからね、その種の発言というのは非常に不愉快であると、もともと不愉快でありますけれど、そういう人達は、特に不愉快であると、そういう感想を禁じ得ませんでした。

すべての情報を集中せよ!!

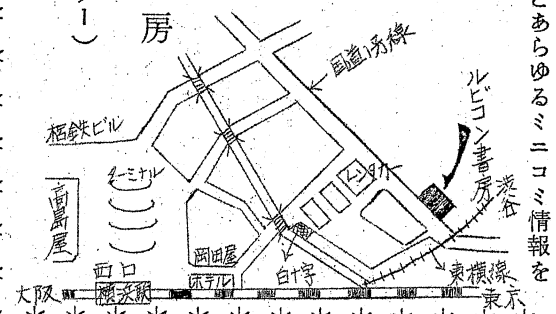
このたび京浜重工業地帯の心臓部、横浜駅西口にミニコミ、パンフ、社会科学専門書店ルビコン書房を設立しました。わたしたちは、この小さな書店を神奈川—全国で闘われているあらゆる運動の有機的結合の環として大切に育てていきたいと思います。

神奈川—全国のありとあらゆるミニコミ情報を集中して下さい。

横浜市神奈川区鶴屋町
一の八　第二盟和ビル
TEL（312）0610

ルビコン書房

（神奈川情報センター）



思想家に於ける『イデオロギー』の価値とは

一週間後には彼らのいったことは破産なんであって、なぜ破産したのかっていうと、それはいわば、イデオロギー、つまり理念の世界、あるいは理論の世界っていうものは、実践行動の世界とは違うからです。実践行動の世界とは、いずれにせよある方針をもって闘いを進め、その方針が、これは行き詰まったとか、これはまずかったとかいうことになれば、方針を転換して行なうというようなことはできるし、またこれはごく普通のことなわけなんだけれど、ただイデオロギーの世界というのは、そういうふうにはいかないのです。何故ならば、イデオロークにとって、イデオロギーとは、いわばそれは実践行為なんですから、そういうことを、これはこういうふうにいってみたら違ったから、事実によってくつがえされたから、だからこうまたいい直すということはできないはずなんです。できないはずのものなのです。

それからまた、これは太田竜とか平岡正明とかそういう連中の悪口をいっても良いわけですけれども、あの連中は、いわば追い詰められて居直っている形ですからね僕と対等の発言の立場を獲得するまでは、あまりいわないことにしているわけなんです。

だから、それはいいませんけれども、第一に僕が申し上げたいことは、イデオロークというのは、理念あるいは思想というものはそれが一週間もたてば何か事実によってくつがえされてしまうというような、そういう位相で語ることはできないんだということを、まずいいたいわけなんです。何故そういうことになるかっていいますと、自分の守備範囲っていうもの、あるいは全社会における自分の立っている位相といいますか、位置といいますか、そういうことが明瞭に、はっきりと自覚されていればですね、その場所から防衛すべき範囲というものは、おのずから、決定的に決まってくるわけなんです。その決定的に決まってくる問題というものを、自分の位相というものをえてしてはずしてしまいますとね、やっぱり無限に、くるりっくるりっと変わっていくっていうのか、そういうふうになっていくより仕方がないわけです。そうしますと、イデオローグあるいは思想者という者は、いつでも、実践家という者に対してコンプレックスを持っていなくちゃいけないというふうに、どうしてもそういうふうになってしまうわけです。

ところで、本当は思想、あるいはイデオロギーというものの世界としては、こういうことは成り立たないわけです。イデオロギー、あるいは思想を表現すること自体の重さというものが、それはまさに具体的な実践家の実践行為というものに、それは重量としてつり合わなければ、それはやっぱり、イデオロギー、あるいはイデオローグとか思想者というふうにはいえないわけなんです。そういうことの問題というのが、はっきりつかまえられていないイデオロークというものが、ポンポン、いわば情況によって変わってくる、情況によって変わってくる具体的情勢に対してですね、適応しようというふうに、考えがちに、どうしてもそういうことになってきてしまうわけです。だから、この問題というのは、まあ皆さん方には何の関係もないわけですけれど、私としては大変自戒するに価する問題だというふうに受け止めたわけなんです。少なくとも僕が、例えば皆さんの方から見ると、あいつは抽象的なことばかりいっていて、というふうに考えられるかも知れないですけれど、それはそうじゃないのであって、これは思想を述べるものというのは、やっぱり一週間位たったら事実によってでんぐり返っちゃったというようなことを言うわけにはいかないのですよ、つまり、大きく間違っちゃったらもうそれで思想家とし、てはてんで失格であるというより仕方ない、それ位、思想自体というものにも僕は重さというものがあると思います。そういうことが厳密でない限り、厳密に守られていない限り、やっぱりイデオロークっていうのはいつでも、実践家という者が切り拓いた道に追従していって、また、いつでもそのコンプレックスを持っていてそれで「赤十字」みたいなことをしてなきゃいけないというようなことになってしまうわけです。つまり、思想は思想なんであって、それはもうどうしようもないわけですよ。それから、全社会に於て、その人間が強いられている位相というものは位相であって、それもまた、どうすることもできないものだというふうに僕には考えられます。つまり、そういうことが、たいへん僕がひっかってきたことの第一のことなんです。

日本的「精神病理学」の限界

それから、もう一つのことは、変な精神病理学者が出てきて、それで永田洋子とか森恒夫とかいうのは、精神異常者だというわけですよ。つまり、おかしいんだ、おかしくなっちゃってるんだ、しかもそれで封鎖的な環境に、場所に置かれて追いたてられていたから、ああいうことになっちゃうんだってことをはっきり言った。これも、ものすごく不愉快なわけです。つまり、僕も親戚に頭のおかしいのがいますからね。それを考えるとね、ものすごく、ちょっと慄然としちゃうということがあるわけなんです。どうしてかと言いますとね、僕は、永田洋子も森恒夫も、別に精神異常者だなんて思っていないわけです。何でもないと思っているわけです。普通の人だと思っています。それで、もっとひどいのは、例えば宮本忠雄とか、加賀乙彦もそういうことを言っているんだけれど、例えば永田洋子という人はパセドー氏病だと、パセドー氏病とは何かと言うと、大変興奮し易くて、おかしくなったんだ、というようなことを言っているわけです。それで僕は別に医学的な知識はありませんけれど、そういう馬鹿なことを言ってもらっては困るということ

はあると思うんです。そういう場合には、バセドー氏病患者というのは結束してああいう医者というのは追っ払っちゃった方がいいと思うんですよ。つまり、そんな馬鹿なことはないんです。何故かといいますとね、そういう精神病理学者というのは、個々の人間の精神　生理といいましょか、そういうものと、それから個々の人間ではなくて、それが共同性の中に置かれたときの精神　生理といいますか、精神構造といいますかそういうものとが、同一な次元で扱い得るものではないんだということを、全く知っていないということなんです。

それから、もう一つは、彼らは、例えば、皆そうなんですけれども、構造主義とか現存在分析とか、自分の依って立っている理論的基盤といいますか、精神病理学上の理論的基盤というものが、全部借りもので、それの解説書として、著書を持っているという、そういう按配なわけです。だから、ああいう場面になると、常識人の心理的かんぐりといいますか、それ以上のことはちっともいえていず、たちまちメッキがはがれてしまうわけです。だから、そういうものとしてしか存在していない医者、精神病理学者に、僕はたとえ、頭が狂ったってかかりたくないわけです。そういう医者っていうのはダメだ、やぶ医者だっていうことを、やっぱりはっきりさせておかなくてはいけないっていうふうに思います。私は、永田洋子という人も、森恒夫という人も精神異常者だとは、少しも思っていません。ごく普通であろうなあと思っています。さて、僕がとにかく第一にひっかかった問題、ひっかかった連中というのはそういう連中なんであって、これから先は連合赤軍なら連合赤軍の問題についてはいっていこうじゃないかというふうに思います。

連合赤軍の敗北と その内的根拠

内部規律にみられる基本的矛盾

私の持っている知識は、商業新聞と週刊誌と、それだけだということを予めお断りしておきます。そこに間違いがあったら僕のせいじゃないということを、予めお断りしておきたいと思います。

ある週間誌に、連合赤軍なるものの規律というのが、それは「週刊読売」だったと思いますけれども、掲載されております。それで、それは原文の通りであるかどうかということについては、今申し上げました通り、週刊誌の記事ですから、私は責任を負いません。ただ、その規律（注1編集部）なるものを、僕が通読したところ、ちょっと、たまげた、びっくりした箇条というのは、いくつかあるんですけれども、例えば、一つの箇条には言葉は違うかもしれませんけど、内容は間違っていないつもりです。つまり〈個人が組織に従属し少数が多数に従属し〉そして〈党は中央に従属すること〉というような箇条があるわけです。ちょっと、これは僕がびっくりしているところなんですけれども、それから、もう一つ箇条をひろってきますと、自分達は私有財産というものを否定するしかるが故に、メンバーの家族、または個人がそういうものを持っているとすれば、それは、全部組織に公開されなければならない、というふうな箇条があるわけです。それで、これに対して、言わばチェックの装置というものにはどういうふうな箇条があるかといえば、それはわずかに一つあるわけなんで、それは下級のもの、つまりメンバーに異議がある場合には、上級の者に異議を申し述べることができるというような箇条が一つあります。それでこのチェックの装置というのは、使い方によっては、先程言いました、個人は組織に従属し、少数は多数に従属し、というような、それから、下級は上級に従属し、というような箇条で完全に打ち消されますから、おそらく、運用の仕方如何によってはチェックはないというのと同じだというふうに考えられます。

それで、私が見た限りでは、その種の規律なるものは、非常に、論理としてつっこんで考えていきますと、結局は、共同性、あるいは組織というものの中に、いわば個人性というもののもちろんのことですけれども、それから、家族性というようなものが、全部組織の共同性の中には溶解しちゃっているというふうに思うんです。そして、そのように、溶解されている、つまり溶かしこまれている場合には、個々のメンバーというのは、言わば、観念としてしか生きられないということは、全く明瞭だというふうに、僕には考えられます。つまり、個人性お

よび家族性というようなもの、あるいは、家族性と言わなくても、男女性と言ってもいいんですけれど、男女関係と言ってもいいんですけれど、そのことが全部、組織の共同性にその規律に従えば溶解してしまうので、そうしますと、人間というのはつまり幽霊としてしか生きられない。つまり、観念としてしかその中では生きられないということになります。これは、どういうふうに鉄砲を撃っても、それは、幽霊が鉄砲を撃っているんだというふうなことにしか、どうしてもならないというふうに思います。それに対するチェックの装置というのは、その規律を見る限り、極めて貧しい箇条しかないということが言えるわけです。この規律というのを僕なんか読んでちょっとびっくりしたわけです。

で、もしこの規律なるものを、忠実に実行すればそれはどういうことでも起こるだろうというふうに、僕には思われます。これはもう悲しいかなこの規律というものを見る限りでは、戦争中の旧帝国軍隊の規律を超えるものでもないですし、あるいに毛沢東の人民軍の思想、言い換えれば、人民軍による国家社会主義的な軍隊ということになるわけですけれど、そういうものを決して超えられるようなものじゃないということが、少なくともその規律というものを見る限りでは、初めから見てとることができるわけです。

言うまでもないことなんですけれども、ある共同性、ある組織において、個人が組織に従属するということは、それはもう申すまでもないことで、それはつまり、共同性として申すまでもないことなんですけども、そのことは決して個人性、あるいは家族性というものを否定するものでも何でもないもので、何でもないという意味あいしかないので、つまり組織の共同性というものが人間というものを共通の場所に置き得るというのは、いわば人間の共同観念の次元においてだけなんであって、それ以外の次元において、どんな共同性を持ってきてもその共同性が、個々のメンバーあるいは個々の男女関係というものに対して、何か強制力を持つということは、共同性自体の概念から全く理論的に考えられないということが、当然なわけですけども、僕が規律を見た限りでは、そこにどうも第一になにか、理論的な錯誤というものが、僕にはあるように思えました。そこには、理論的な錯誤というものが、集中的に現われていて、つまりどういうことかといいますと、人間が生み出す共同性というもの、あるいは共同体というもの、あるいは、組織といってもいい訳ですけれども、そういうものと、それから個々の人間というもの、それから男女関係といいましょうか、つまり家族といいましょうか、そういうものとは、観念の世界としても、全く次元が異なるものであるというような、そういういわば理論的には大変自明なことなんですけれども、その自明なことっていうものが全く間違えられているということはちょっととてつもないことだというふうに考えられるわけです。

死を孕むアジア的
論理構造の弱さ

それでは、どうしてそんな規律が有用なんであるか、どうしてそんな規律が必要なんであり、どうしてそんな規律を承認した上でメンバーとなり得る人間というものがいるのだろうかというようなことを考えてみますと、僕なんかが考えられる唯一のことは、こういうことだと思うんです。つまり場合によってはいわば死をも覚悟しなくてはならないというような組織あるいは共同性というものは、やはり味方、つまりメンバーに対しても、場合によっては死に至るかもしれない規律というものを設けなければ、それは死に至る覚悟をもって敵と闘うことができないんだというようなそういう何か論理構造というものが、先見的にあるのだと僕には思われるんです。これは、ひとごとではないので、僕らはさんざん戦争中それで悩みもし悩ませもし悩まされもしてきたことなんですけど、僕らが、戦争を経て、戦後にいだいた第一の教訓というか考えどころというものはそういうところにあったというふうに思います。それば何といいますか、死をも要求される敵との闘いというものを遂行するためには、メンバーに対しても死をも場合によっては招くかもしれない規律が厳守されねばならないというそれでなければ到底そんなことができないのだというそういう論理構造自体が大変問題なんではないかというふうなことを戦後すぐに考えたというふうに思います。

それに対しては僕なりに決着をつけたいというふうに考えていますが、その決着というものはどういうことかといいますと結局、死をも要求される闘いというものを遂行するために、やはり自分たちのメンバーも又組織も、死をも要求される規律が必要であるという論理構造自体は大変アジア的なものであって、それは駄目だということを徹底的に考えたように思います。で何故だめかといいますと旧日本軍隊というもの、それから軍国主義そのもののイデオロギーがそうだったわけですけれども、何といいますか足並がそろわなければひっぱたくし、それから鉄砲のかつぎ方が悪ければひっぱたくし、とにかくもう何かあればみんなひっぱたくという、規律で、鉄砲のかつぎ方で手が少しまがっていたらもうひっぱたくという、そういうことで保たれる軍隊というものがいかに弱いかということは、敗戦で、僕ら腹の底までしみわたるように徹底的につきつけられたように思うのです。

そしてそういう人たちは、誰かが戦争をやめろといったら、いっぺんに戦争をやめて、軍が貯めた食糧などを持てない程いっぱいかついで、故郷に帰って来ちゃうわけです。全く、その直前までは命を賭してまでもとやってきたものがどうしてこういうことになるのだということを腹の底から見せつけられたということがあるわけです。でそれを基にして、そういうことについて僕らは徹底的に考えたように思います。だから、こんなに足並そ

ろはなくちゃいけないとか鉄砲はこうかついじゃいけないということを大事なこととする、あるいは生きて捕虜の辱かしめをうくるなかれみたいな規律を持った軍隊なんていうものは全く弱いのだということは、よくよく考えなければならないというふうに僕には思われます。

ほんとうの強さというものはそういうものじゃないんだということ、つまり、よっぽどガムをクチャクチャ噛みながら鉄砲なんか反対にかついでフラリフラリ行進してくるような軍隊のようなものの方が強いということはよくよく考えてみなければいけないというふうに思います。これは例えば軍人なんかは日本というのは物量でもって太平洋戦争なんかはアメリカに負けたんだという弁解をしますけど、その弁解は全く嘘であって要するに思想で負け精神で負けたということなんです。つまりどう考えたってガムをクチャクチャかみながら鉄砲を逆さまにかついでフラフラして行進している奴の方が絶対に強いんですよ。足並がバッバッバッバッと揃つて、ちょっと足並が狂うと足をひっぱたいて矯正するというそういう軍隊はいかに弱いかということを戦争に負けて、あきらかに目の前につきつけられたのです。そして目の前につきつけられたそういう事実を基にして僕らがどういう論理構造を持っていたが故に、こういうことになったかという問題については徹底して考えたように思います。そして結局至りついたところはやはり、死を賭する、死を覚悟して闘わなくてはいけないというようなそういう闘いを遂行するためには、やはり死をも含むような厳正な規律が必要であるという論理ということ自体が、それは駄目なんだ、つまりそれは非常にアジア的なもので、アジア的という意味は古代以前のものであって、それは徹底的に駄目であって徹底的に弱いんだということを僕らはその論理自体あるいは理念自体が弱いんだということを徹底的に考えたというふうに思います。

日本帝国主義軍隊を支えた論理

つまりそういう問題に照らして言いますと、連合赤軍の規律というものは、全く無残なものだというより致し方ないんです。そのことは理念的敗北の非常に大きな要素をなしているように僕には思われたわけです。これに対してやはり言わなくちゃいけないですけど、これは週刊誌の知識のなんですけれども寺沢一という東大の先生がいますけれど、その先生が、こういうふうに言っているのが僕にはものすごくひっかかっている。シャクにさわっているわけです。つまり、今までいいましたうちで、一番シャクにさわっているわけです。つまりこういうことを言っているわけです。戦中派だったら浅間山荘事件のような時にはやっぱり腹を切る、つまり自決するだろう、それなのにあの連中はのめのめ捕虜になってきたという発言をしているのです。これはちょっと許しがたいというふうに僕には思われます。何故かといいますと、僕は寺沢一という人のことは他のことも聞いているのです。つまり東大闘争のとき安田講堂の攻防の時も、何か一人ぐらい飛びおりる奴がいるかと思ったら何だというふうに言ったということを聞いているのです。それがあるから尚更、面白くないわけですけれども、そうしておいて例えば自分は、同僚である林健太郎が監禁されたとき、監禁かどうか知りませんが監禁されたとき、助けようともしないわけです。学生どもに吊し上げられたらそこらへんにあるのでも、ぶつけたり、引っぱたいてもいいから、渡り合ったということも自分にはないわけです。

そのくせに、いわば極限状況におかれた人間に対して、戦中派なら腹切るところだ、自決するところだということを抜け抜けと言うことは僕には耐えられないわけです。何故耐えられないかというと、僕も年代的にはそうなんですけど、戦中派というものの面汚しだというふうに思うんです。どうしてかといいますと、それは結局、戦争において日本帝国主義軍隊を支えた論理・理念というものがありますけど、そういう論理自体に対して、何ら、先ほどの言葉でいえばひねりといいますか、つまり内省というものを加えずに戦後、額面だけは戦後民主主義あるいは市民主義というものに滑り込んでしまっているということ、それだから、戦中派だったら自殺するんだということをぬけぬけいうわけです。

だけど僕はそうじゃないので、先ほど言いましたように、鉄砲はさかさまにかついでガムはクチャクチャするしダラダラと歩いて行くし、危なくなったら降参して手を上げる、そういう軍隊の方が強かったということはまのあたりに見ているわけです。つまりそういう軍隊の方が絶対に強いわけです。だから、そのことはまのあたりに戦中派になら教訓としてみているわけです。それならば戦争中の帝国軍隊というものを支えた、論理構造に対して何らかの内省があってしかるべきなんですけれども、それは、つまりそういう内省というものなしに、同じ論理構造というものをいまもまだ保っているわけです。これは三島さんにしても同じなんですけれど、保っているわけです。しかし、保っているくせにそれじゃ自分はどうなんだったといったら、自分は同僚が学生どもに監禁されていたといったって、それを助けようともしないし、また自分が学生に吊しあげられても、ぶんなぐられてもいいから学生をぶんなぐってやるとかいうこともしないくせにして、相手に対してそういうことを要求するという論理構造というものは全く帝国軍隊そのものの論理構造なんです。アジア的共同体・共同性というものを支えてきた論理構造というものはみんなそれなんですよ。

精神的退化を強いる情況

僕は悪いけれども毛沢東に関心したことは一度もないんですけど、どうしてないかというと全く馬鹿なことをいうんですよ。つまり革命戦士というのは魚で人民というのは海で、海がにごったら駄目だとか、海がちっとしかなければ、水たまりがちっとしかなければ、魚は泳げないということをいうんです。そんなことあほらしくて聞いていられるかということになるわけです。そのことは徹底的にいっておかないといけないのですよ。つまりどうしてかというと僕はいやしくも詩を書いているのですけど、

人民が海
革命戦士が魚

なんてことを書いたらやっぱり問題にならないのです。そんな詩を書く奴はやっぱり問題にしちゃいけないと思います。つまりそれは駄目なんです。それは直喩、比喩のうちで最も単純な比喩で、そんな比喩で語れる形式論理というのは、やっぱり究極的には駄目だというよりいたしかたないと思います。それで、これはどうしようもないのです。どっからどう叩いてもそれに関心するわけにいかないのです。

それで僕がこんなことをいうと、何だお前は何もしないくせに、毛沢東は少なくとも中国革命をやったんだぞといいたい所があるでしょう。しかしそれは重々承知の上で、僕は、そういう奴が革命やったってどうってことはないという事は、はっきりさせていかねばならないと思います。そんな事言ったって、やはり中国革命を成就させたからちょっと遠慮しておこうじゃないかという事は、この際、止めた方がいいと思います。つまり駄目なものは駄目だというふうに、はっきり言った方がいいと思います。それは、そういうふうにやっていきますと、人間の精神構造というものが、共同性という場合でもそうなのですが、人間の精神の世界というものは無限に退化することができる訳なのです。だからそういう退化というものが、どうしても避けがたいような情勢みたいになっていきますと、いわば、その種のことと言うのはいくらでもぶっかかってくると思うのです。だけど声を大にして、ではないけれど声を出して、言わなければいけないように思います。

例えば、僕らも、こういう話はいやなのですが、自分でも思い出すと嫌なのですが、戦争中ですと同年代あるいはそれより下の年代の人達は、やはり軍隊へ入ってそこで軽業師的な訓練をして、それで、そういう人達がどんどん飛行機に乗って、すっとんでいって自爆して死んでしまう訳です。そういうのを目撃して僕も同じ年代だし若かったらちょっとかなわないのです。かなわないと言うのは、「こいつらにはどう考えてもかなわんな」と言う物凄く劣等感とか、何か、こう渦まくわけです。それでもうやり切れない訳です。やっぱりやり切れないわけです。やっぱりやりきれないとどうも僕なんか、学校へ行くのはいけないのではないかというふうにも考えますし、ちょっとやり切れない訳です。

そういう時にあれは駄目なんだというふうに何故、言えないのかということは、その当時の僕では出てこない訳なのです。だからもの凄く何と言うかかなわないという事で、いつでもそういうことにひっかかってくるという体験というものがありますけれども、それはやはり僕は戦後に徹底してそのことは考えたように思います。そして結局、そういう訓練というものと命の安さというものは、やはり強くないんだというより仕方のないものだと思います。それは本当の意味でも強くないと考えるよりいたし方ないという論理に、やはりどうしょうもなくなっていく訳です。だから、その所は徹底的に考えたことの一つのように思います。こう言う事は皆さんに言っても、おそらく納得してくれないだろうと思います。

つまり若い人が何かにとりついて、何かをまっしぐらにやろうと思う時は、端からどうする事も出来ないのです。つまり、それは論理的に仮に納得しても、それは絶体に止めることは出来ないのです。その様な意味で、そういう事は、そういう言い方をすると大変良く解るのですが、僕には、やはり弱いというしか致し方ないと思われます。その問題は、僕などにとっては連合赤軍事件が提起した大変な重要な問題のように思われます。

連合赤軍事件と戦争体験

連合赤軍事件に対する理解の仕方というか、裁き方というのには、僕には、それ程動揺というのはないのです。学ぶべき事も沢山ありましたし、批判すべき事も沢山ありましたけれども、それらに拘わらず僕の方には動揺ということはないのです。しかし皆さん方のほうは恐らく非常に強烈なものだと考えられます。それはいたし方ないのであって、その事に対して僕は説得力を持とうという考えは毛頭ないのですが、ただ僕等の論理ではどうしても、そういうふうになるという事、つまりアジア的共同性というのは、やはり駄目なんだというふうに究極的には思うより仕方がないと論理構造がなっていきます。感性的な面から言いますと、味方を殺せるくらいでなくて、どうして敵を殺せるのかという様な心情が存在するかも知れません。その事にも僕は大変解る様に思うのです。つまり僕も自分の思想をどうやって形成してきたかと言うと、味方をやっつける事で形成してきた様に思うのです。だからそういう考え方というのは大変良く感性的に解るからこそ、この所は非常に同感するのです。ただ同感するという心情をささえる論理というものは、はつさりさせておかねばいけないように僕には思われます。

そしてそう言う問題というのが一番大きな問題として在った様に思います。そしてそういうものの種々の反応の中で、やはり僕が一番愉快じゃないと思ったのは寺田一のそういう論理構造な訳です。

それが戦中派だと思ったら大間違いだと、声を大にして言いたいと思います。つまり戦中派というのは、いったい何なんだと言う場合には偶然によって、ある場合には必然によって人を殺した経験がある人間であり、自分の肉身を一人か二人誰か必ず殺されている人間なのです。戦中派以前というのは皆そうなんです。だから皆、そういう意味では犯罪者か殺人者の様なものなので、それは口をぬぐって戦後を生きてきたのですから、余程ずうずうしいと言う事は、僕も含めて変りがないのです。ただ、ずうずうしくか、ずるずるとか生きるためには「何故自分は生きなくてはならないのだ」と言う事については、とことんまで自分なりに考えて戦後やってきたと思います。で、その事がもし何らかの教訓と言うか、何らかのそこから引き出し得るものがあるとすれば、引き出してもらいたいと考えます。だから僕は、寺田一みたいなのが戦中派の典型みたいな口ぶりを弄するのはおかしいと

思いますし、一方で安田武みたいに戦争は嫌だ嫌だばっかり言って、俺は東条に強制されて戦争に行ったんだ、を連発している奴がいますが、そういう奴がまた戦中派の典型だと思ったら大間違いであって、冗談いうなと僕は言いたいですね。つまり嫌々ながら戦争に行ったと言いながら結構楽しい思いもしたんでしょうし、場合によっては人も殺したでしょうし、冗談いっちゃあいけねえよと思う訳です。つまりその種の人に何かあれをあずけてそしてあれをする、あずけて何が戦争、たとえば戦争体験の問題というものを、その種の滑らし方でどんどん滑べらして行ってしまうのが、別に戦中派ではないという事をはっきりさせておかねばいけないと思われました。

現代世界を覆いきる強靱な論理の構築を

共同性に於て押えるべき原理

現在の情況というのを考えていきますと大変難かしいことになっていまして、これは皆さんの方もやっぱり難しいでしょうし、僕らも難しい思いをしていますけれども、ここで僕らが演じてはならないことはあると思うのです。それは一つには退化を演じてはならないということなのです。つまり精神なんてのは、どんな名目でもつけられるわけですから無限に退化することが出来るわけです。で、このことははっきりさせておかなくてはいけないということがあるわけです。それからもう一つのことは、一種のブロック国家論みたいなもの、つまり、社会主義国といったものをだんだん増やしていって、資本主義国と平和裏に対立していけば何んとかなるんだという考え方があるわけですけど、そういう考え方はやっぱりとるべきではないと考えます。つまりそういう考え方をとっていった場合におこってくるさまざまな問題というのはやっぱりそれはそれなりに歴史が目の前に見せてくれるわけですし、くれているわけですから、その考え方というのはやっぱりとるべきではなかろうというふうに思われます。それではとるべき考え方は何もないじゃないか、まったくない訳です。何もとることができないわけです。しかしとることが出来ないということで全部がおさまりがつくということは、まったくこれもありえないので、またこういう情況自体が、何らかの形で、それぞれの場所でもって丁度、ある共同性を強いられているということが、やはり、現在においてもあると思うのです。で、この共同性を強て我々が原則にするということは非常に簡単なので、結局、中間にどんな困難な、そしてどんな長い過程があっても要するに究極的におさえるべき原則というものは、つまり政治にも関心をもたないしイデオロギーにも関心をもたない、そして身の回りの生活の中だけにしか関心をもたないという人の中に権力が究極的に移行されねばならなということ、それがいわば最終のあるいは少くとも出発の究極原理であって、その過程を通るために権力も必要であるし、共同体も必要なわけですけれど、しかし究極的にいえることは、要するに政治的にはまったくニュートラルに等しいそういう人たちの中に権力が移行するということが結局究極の目的なんであってそれ以外の何ものでもないということはいうまでもなく明瞭なことであり、ちっとも疑わしいことではないと僕は考えています。

つまり、そういう問題というものは、どんな共同性が組まれる場合でも、たえず原則的に包括されて考えられていなければならないということは全く客観的にいえば、申すまでもなく明らかなことであると考えます。

ただ、そんな所に恐らく現在の困難性というのはないのであって、いったん共同性を組もうと思えば、その共同性は非常に堅い、殻の中で堅く閉じられてしまわなければならない権力からの必然性と、内部必然性がある。その堅く閉じられた共同性の中でのみ起こり得るだろう様々な問題がおこり得る。そして、それをよけて通ることはできないし、また、自分は目覚めて人を殺すこともいやだし殺されることもいやだと、個々の人間が目覚めれば、そういった問題は解決がつくかというと、そういうものでも問題はないわけです。

情況基部に迫る普遍的原理を

それから、週刊誌の知識ですけれども、赤軍派の違うメンバーが、あいつらダメなんだ、リンチなんかダメなんで、そして間違いであって、非人間的な人であってダメなんだというふうな批判というのをやっていますが、僕は、そういう批判というものを余り信じていないのです。つまり、僕らが、たとえば、自分が当事者であったら、やっぱり自分だってやりかねないわけですし、そういう意味あいで、誰からも、免罪符を得ているわけでもなんでもない。だから自分だったらあんなことはしないよ、というのは一定の距離間隔をゼロにつめていけば、やりかねない。距離を保っていけば、それに対する批判、内省や反省ができるわけだけれども、しかし、それはいわば、距離をとっているから言えるというのは全く自明なことであって、問題はそのことではなくて、おそらく連合赤軍の場合でも規律を背後からささえている論理、あるいは、理念の中に、非常に多くの問題ー距離が遠かろうと近かろうと、やはり、そのことが問題なんだという問題が潜んでいるように思えるのです。ですからその所の問題を徹底的に解きつくせない限りは、これは、どんな傍観者といえども、どんな市民といえども、連合赤軍のメンバーを非難するという資格はないとみなければなりません。

つまり、これは僕なんかの経験から照らしてもそうなんです。僕らでも、「あんちくしょう、ぶ殺してやりたいなあー」ということは、日常茶飯の中であるわけで、そういう事は考えては消え、また考えては消え、と繰り返しながら泥沼のような日常性の中に泥まみれになって生きているのが現在の情況だと思います。そして、情況というものは、決して情況自体として肯定されるべき要素はないのであって、そういう意味合いでいって、あれを批判する資格は、お互いどんな普通のなんでもない市

民にでもないと思います。ちょっとだけ、そのことは自分の問題に目を向けてみれば、すぐに洞察できることなのです。だけれども、先程の戦中派の教授じゃないけれども、アジア的社会における社会の残滓というものはそういうものであって、自分がちょっと内側に目を向けてみればすぐにわかると思います。あれが非難できない、あれが特別なことでもなければ、あれを非難する資格がないというのはわかりきっているはずなのですが。つまり、アジア的な感性とか、アジア的な観念共同性というものは、そういう場合は自分は棚に上げておくというふうな非常に身勝手な論理というものはいつでもあるわけです。

週刊誌に書かれた永田洋子という人の弁護士にあてた手紙とか、友人にあてた手紙とかが、載っているのですが、その中で彼女はこういったことを言っています。つまり、言葉は違いますけれども、どうしてこういうふうなことになっちゃったのか、それはリンチ殺人事件ということを指しているのですけれども、自分でもよくわからないところがある。だけど自分たちは決して精神異常者でもなく犯罪者でも何んでもなく、ごく普通の人間だというふうに思っている。これを精神異常者の閉じられた社会でもっての閉じられた凶行みたいに考えられたら困るんだということとそれから、どうしてこういうふうになってしまったか自分でもわからないところがある、それでこの問題は自分たちが必死になって極めつくしてその問題を打ち出してこなければならんということを言っています。僕は連合赤軍事件で、様々な言論、様々な個人的発言というのを聞いたんですけれども、その中で、やっぱりそれが一番立派なように思えました。そして他の人の発表された上申書に比べても、この人のが一番優秀だと思いました。それはやはりそれだけの体験の中から、そして、その時必然であっても、ひょっと距離を置けばとてつもないことというのは人間には誰れにでもあり得るのです。だから、その途端で考えた場合にどうしてこんなことになったのか自分でもわからない所があるということは確実にあり得ると思います。そして、そのことを、必死になって考えてはっきりさせねばならないというのは僕は当事者としては全く見事な発言だと思いました。だから、おそらく様々なカングリをのけても、彼女は最も優秀なのではないかと思います。

必死になって考えなければならないというのは非常に重要な事であって「こんな非人間的なことはやめようじゃないか」というような、いわば、距離を置いた次元で、あるいは自分の内側に目を向けない次元でなされて終ったら、それまでのことなんであってそういう問題ではないのです。これは、やっぱり、必死になって考え、そしてそこからうち出してくる論理というものは、やはりすべての人に現在の情況に置ける全ての市民に、それら全てのイデオローグに、それから全ての組織にという形で通用するだけのものがうちだされてこなければならないというふうに思われます。これは、当事者はもちろん、いささかでもそれに関心を持つならばそういうことは必死になって考え、それをいわば普遍的な原理、普遍的な共同性の原理として取り出されていかなければならないというふうに僕には思われます。

固有領域の論理の深化から世界に至る論理を

今回の連合赤軍事件がそういう問題をわれわれの眼前に提起してくれたというのは非常に重要な事であって、その問題というのは、突きつけられた課題として、自分達が咀嚼していって、何が共同性なのかどういう共同性が可能なのか、つまり、そういう問題というものを、現在における世界の情況といったものを、全部いわば照し出すといった、それだけの高まった力量のある論理として打ち出されてこなければならないと思います。日本というのは世界の吹きだまりみたいな所ですから、いわば、全世界における様々な、組織悪それから何とか悪といったものを全部背負いこむだけの論理を自分達の手で作り出さなければ、おそらく何事も始まらんだろうと僕には考えられます。つまり、こんなものは植民地帯や後進地帯をトンネルで結げたらなんとかなるという問題でもありませんし、そんなもんじゃないと僕には思われます。やはり、適当な重荷に耐えるといったものを自分達の中から作り上げていって、それに原理としての普遍性があたえるまでそれはつきつめられていかねばならないと思われます。

その課題というのは避けることはできないわけで、そうでなければ例えば、僕らは、レーニンやトロツキーはたまたま運がよかったんだから革命ができたんだということでいなしてしまう問題になってしまうと思います。そういう問題なのではなく、一人のレーニンが、あるいはレーニンの組織がでてくるためには、遠い所からいえば、トルストイがおり、ドストエフスキーがおり、ツルゲーネフがあり、といったいわば当時の世界文学の中で、イデオロギーは別として、どれ一人をとってきても、優に、世界文学をリードすることができるといったいわば巨匠の存在なしには、レーニンは出てくることはできないわけです。あるいはレーニンの組織というものは出てくることができないのです。文化の面でいってもそうなんです。それから学問の面、研究の面においてもそうなんです。これはいわば、ヨーロッパの学問をこっちに持ってきて、現存在分析だといってたと思っていたら、連合赤軍事件が起れば、あれは気違いだ、気違いだといって済ましてしまう。そういうような、ちょっとあれすればバケの皮がはがれてしまうような学問でもって、革命の課題を政治運動家に委ねるための責任というのは学者として果せるわけはないのであって、学問の研究、文化の創造どれ一つとってきても、やはり全部現在の世界における文化なら文化、文学なら重量を全部背負いこんで、そ

れを普遍化できるものの存在なしには、いわば終着点や発端点にとりつく、どういう共同性といったものを思い描くこともできないということが言えるわけです。これは、組織的主観といったものや、あるいはセクト的主観とは全く違うのであって、そういうものの存在があらゆる面でてこなくては、決して、革命に到達する組織、あるいは革命に到達する共同性といったものが、生みだされるはずがないのです。つまり、そういう所で、どう考えたって文化的にも学問的にも貧しくて、猿マネばかりして、自分達の力で考え建設しようとしない連中こそが、連合赤軍の共同性を貧しくさせてしまった非常に根本的な、いわば前段階的な責任は恐らくそこにあるというふうに考えたらよろしいのです。これは皆さんの中に政治運動家、組織運動家がいたら、そういう意味で考えて欲しいのですが、組織運動あるいはセクトそれ自体でもって何かできるということはないのです。何かが始まるという兆候は、そこで見てもわからない所があるんです。そこではない所を見ればわかることがあるんです。それは、どこでもいいから見渡してご覧になればわかります。つまり、機が熟しているのか、そうでないのか、自分らの組織が何が出来るのか出来ないのかを判定する基準というのは、文化を見渡しても、学問の世界を見渡してもいいのです。あるいはごく普通の市民の姿を見渡してもよろしいわけですけれども、その所を見渡してもやはりそのことの判定はできるのです。つまり、そこの所で世界を背負いきれないものしかなかったとしたならば、あるいはかえって貧しいものしかなかったとしたならば、それはある政治セクトあるいは、政治的共同体といったものが単独で、どんなに頑張っても、それはどうしても到達できないのです。つまり、そういうことはすでにはっきりしている問題だと思われます。だからそういうことは、やはりよくよく考えてみなければならんということがあると思います。それは決して手をつかねるといったことでもなければ、何でもないわけですが、しかし、例えば連合赤軍みたいな組織をそういうふうにならしめた根拠、つまり、根源といいますか、原因といいますかそういうものは何かといいますと、それはごくなんでもない市民の中にあり、文化の中にあり、そして学問の中にあり、全部をそれを見渡してみればすぐにでも解ります。つまり、そこに恐らく前段階的な責任みたいなものみたいなもの、兇悪性といったものがその中に潜んでいると僕には思われます。

僕はその中で、自分だけを解除しようという意識は少しもないのです。しかしやっぱりそういう問題について、たえず接近していかなくちゃいけないという課題はたえず手離したくないと思います。この事が連合赤軍事件といったものが、僕らに与えたいわば、衝撃の中で、僕なんかにとっては最大に汲みとるべき問題のように思えるのです。これは先程、司会者の方は、もっと早急に、もっと具体的に何か共同性の問題というものが提起された

らというふうにいわれておったようですけれども、僕はもう少し迂遠な所からその問題は、詰め将棋ではないですが、詰めていかねばいけないというふうに考えています。このことは多分非常に困難なことであるし、またある意味では、重要なことだというふうに思われるのです。

軍事の問題は観念の問題である

皆さんは余り賛成でないかも知れないが、僕は軍事は観念の問題だというふうに考えています。つまり軍事の問題だというのは何かライフル銃をかっぱらってきてこれを撃つという問題だというのは、どういうことかといいますと、権力に向って、どの道をどういうふうに行ったらそこにいけるのかというような通路を探究していく通路をみつけだすといった問題が軍事問題の本質的な問題だと僕は考えています。そしてその通路は、現在の段階でつけることが出来ないのです。つまりわからないのです。わからないというには僕らの能力の問題もあるかも知れませんけれども、そうじゃなくてわからない所があるんです。客観的な情況としてわからない所があるのです。そして、そのわからないといった問題がどうしてわかるようになるのかといった問題があるけれども、その問題はおそらく今言いましたように、どこの世界を見回しても現在の世界問題を覆い切るだけの論理と強靱さと普遍性がそれに向って芽ばえてこなければどうしてもわからない、どういう通路かわからないというようなところを抜けることができないだろうというふうに考えています。僕が考えている軍事の問題というものは、全くそういう問題で、それは山崎カヲルのように、軍事の問題は九十%は軍事技術の問題なんだというのは僕は全く反対です。絶対にそうじゃないんです。全くそういったプラグマティクな問題じゃないんだというふうに僕は考えています。そこには、少しも本質がないというふうに考えております。

その本質というものに、いくらかでも接近していくためには、様々な兆候が、あらゆる分野、あらゆるジャンルでそれが必要なように思われますけれども、残念ですが、現在での段階で、そういう兆候は全く貧しいというふうに考える外に致し方ないと僕は考えています。これで一応おわらせていただきます。

（了）

(注)　連合赤軍に条文化した軍規が在ったかどうかは、連合赤軍に加った多くの人達が死亡又は、捕われているので明確につかみ得ない。しかし、赤軍中央軍が連合赤軍に移行する過程では、赤軍中央軍の軍規が併用されていたと思われる。赤軍中央軍軍規については公の出版物でこれまでも明らかにされており、それは一九六九年、赤軍入隊宣言として条文化されたもので、実質的に軍規として扱われていたと思われます。吉本氏がここで述べられている「規律」については、連合赤軍のそれではなく、共産同（Bd・G）のそれと思われます。また、それ自体も信憑性の非常に薄いと思われる点を明らかにしておきたい。

「赤軍入隊宣言」

①　全世界プロレタリア人民開放のために、世界革命戦争を遂行し、資本主義を全地球上から抹殺し、世界社会主義共和国樹立、世界社会主義、世界共産主義建設のため、赤軍に入隊することを誓います。

②　赤軍兵士にふさわしい規律ある隊内生活を送ることを誓います。
(イ)射撃訓練、肉体鍛錬を進んでうけることを誓います。
(ロ)武器の管理を正しく常に隊舎を清潔にすることを誓います。
(ハ)政治警察との闘いに勝ち抜く高度な革命精神を養うことを誓います。
(ニ)常に共産主義を、実践、理論、生活に於いて学び、赤軍兵士にふさわしい人格を養うことを誓います。
(ホ)全ての兵士を兄姉として尊敬し、立派な兵士になることを誓います。

③　人民に対しては赤軍兵士としてふさわしい先例を作ることを誓います。
(イ)敵との戦闘に対しては、果敢に闘うことを誓います。
(ロ)人民の社会主義生産の先頭に立つことを誓います。
(ハ)全ゆる工作を必ず貫徹することを誓います。

④　以上を意識的に破った場合は、反革命兵士として恥辱を受け、死刑に価する。

以上、序章八号二三頁より抜粋。

いまはむしろ背後の鳥を撃て
吉本隆明

1972年8月5日発行
発行ルビコン書房出版局
横浜市神奈川区鶴屋町1の8　第二盟和ビル　電話045—312—0610
定価　120円

定価　120円